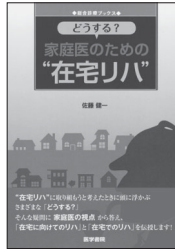


〔評者〕

葛西龍樹

福島医大主任教授/地域・
家庭医療学



どうする？ 家庭医のための“在宅リハ”

佐藤健一 著

A5判 頁216 2012年

定価 4,200円(本体 4,000円+税 5%)

〔ISBN978-4-260-01623-0〕医学書院刊

「在宅でのリハと在宅に向けてのリハ」を家庭医が準備し実践する際に役立つ本が出版された。しかも著者の佐藤健一先生は、北海道家庭医療学センターで家庭医療学専門医コースを第一期生として修了した家庭医である。本書は、臨床的な事項の合間に、佐藤先生がより良い家庭医療を求めて旺盛に学びの機会を広く探求していったエピソードやその成果も含まれていて、いわば物語を読むような面白さで読み進めることができる。

家庭医としての必須のアプローチである高齢者総合的機能評価(comprehensive geriatric assessment)と患者中心の医療の方法(patient-centered clinical method)をベースにしたうえで、そこに生活の場、予防、精神面のケア、そしてチーム医療にこだわった数多くの在宅リハビリテーションで有用なヒントが盛り込まれている。

本書では、随所に読者を刺激する問いかけがあり、その答えを探しながら読むこともできる。中には従来行われていたケアについての健全な批判が述べられていたり、ケアについての根源的な問題も含まれていたりしてはっとさせられる。そのような問いかけは、例えば、「そもそもリハってなんだろう？」「物理療法はリハ？」「どの時点の能力を基準にするのか？」「廃用症候群としての筋力低下をどう考える？」「なぜ身体を

動かすのか？」「廃用症候群は診断をつけることができる？」などである。

これらの問いかけすべてに本書が十分な答えを提示しているわけではないが、読者は本書によって興味を刺激されて、答えを見出すためにさらに自分で情報を集めたり、そうしたまだ答えのない臨床現場の疑問に答えを出す臨床研究へとチャレンジしたりしていくかもしれない。もしかしたら、そんなことも佐藤先生が本書を執筆した隠れた狙いなのかもしれない。

通常の書評の範囲を越えるかもしれないが、筋力維持・向上や間接拘縮の予防のための訓練については、なかなか書籍だけでは十分に理解して実践しにくいものである。DVD などによる画像での情報提供や講習会などの学習の機会をぜひ佐藤先生が中心となって企画していただけることも期待したい。

日本の医療制度の最大の課題はプライマリ・ケアをどのように組織化するかということである。プライマリ・ケアはチームで行われるもので、そのチームで専門医としての役割を果たす医師が家庭医である。リハビリテーションの分野のケアでも約8割はプライマリ・ケアで安全に対応できなくてはならない。こうしたコンテキストの中で、今後日本でも家庭医をめざすすべての医師がリハビリテーションを学ぶ際の入門書として、本書は最適である。